2025 年度 日本質的心理学会
「優秀現場研究報告賞」受賞論文および授賞理由

北村篤司・北村つかさ
「夫婦間の対話を促進するための実践の試み―共通性と差異から生じるリフレクティングに注目して」23 巻 Special 号（2024), p.S32-S38

本研究では，当事者同士による当事者研究やオープンダイアローグに着想を得て，筆者夫婦と 4 組の夫婦とのダイアローグを行っている。そして，ダイアローグによって生じるリフレクティングで明らかになった夫婦間の共通性と差異を中心に，各々の夫婦について理解が深まる可能性を提示していた。

夫婦や家庭はそれぞれ唯一のシステムをかたちづくっていて，自分がいるのはどんなシステムなのか，内側にいると自覚しづらい。ダイアローグの単位は通常個人であるが，夫婦を単位に据えることで，夫婦同士の対話により生じるリフレクティングにより，各々の夫婦がかたちづくっているシステムの自覚ができることを本研究は提示している。さらに，本研究で実施した夫婦同士の対話に，課題に記されていた夫婦内の対話をくわえて，二重の夫婦間の対話を検討することで，新たなダイアローグのかたちを切り拓くことが期待できるのではないか。現時点の成果は萌芽的な内容にとどまり，課題（本調査協力者は当事者研究者になっていない，知人同士以外に拡げる可能性など）も少なくない。しかし夫婦研究の今後の発展可能性への期待が高かった。ぜひ夫婦研究をつくっていってほしい。

広津侑実子
「心理職は聴覚障害のある人をどのように認識しているのか―聴覚障害のある／CODA の心理職と聴者の心理職の語りの比較から」23 巻 Special 号（2024), p.S78-S85

聴覚障害のある人に対する心理的支援はいまだ少ない。その要因の一つとして，聴覚障害のある人に対する心理職の理解が進んでいないことが挙げられる。著者はろう学校でスクールカウンセラーとして実践を行いながら，聴覚障害者への理解の枠組みに，健聴者の視点がどのように入り込むのかという課題に取り組んでいる。本論文は，聴覚障害のある人を支援する心理職への半構造化インタビューを実施し，聴覚障害のある人の置かれている社会的背景，対人関係・コミュニケーションの様相，障害にまつわる特性が，理解の枠組みになっていることを示した。さらに，聴覚障害のある／CODA（聴覚障害のある親をもつ聴者の子ども）の心理職と聴者の心理職で認識のありようを比較検討した。手話か人工内耳によるサポートかという二分法ではなく，生き生きとしたコミュニケーションがどういう風に生

じるか。その内実をよく示した研究になっている。聴覚障害のある人への心理支援において，思考や感情を含むコミュニケーションを可能とする関係性を構築していくことの起点を示すものである。

酒井晴香

「個人商店における出会いの予測可能性とあいさつ行為」23 巻 Special 号（2024），p.S112-S118

本論文は瀬戸内海の島しょ地域の個人商店における店員と常連客の相互行為開始局面を2つの商店を比較して分析している。両店とも店舗空間の物理的境界を越えて店員と客の出会いが始まる。一方の商店では，あいさつ行為が不在であり，他方の商店では，呼びかけとしてのあいさつ行為が観察された。本論文の優れている点は，まさに現場での調査を通して，一商店でのあいさつ行為の不在理由を突き止めたことにある。つまり，この商店も含めて人々が滞留する習慣が地域社会に定着しており，それによって，コミュニティ全体に「偶発的な出会いに対する身構え」が共有されているからである。人類学のアフリカ研究からヒントを得て，相互行為の開始手続きを踏む必要がないほど，出会いが常態化した結果，あいさつ行為の不在が起こるという説明は説得的である。外から店内が見えない別の商店では，通常のあいさつ行為ではなく，自分の来店を店員に気づかせるために，あいさつを呼びかけとして利用することが観察された。島しょ地域という比較的コミュニケーションが限定された空間において，出会いの予測可能性が生まれる機序をよく分析できている。